

捕物帳の 作家たち ― 捕物作家クラブ 展

2020年9月15日

よりWEB上にてアーカイブ展示

本展示の画像その他文面などの無断転載また無断使用はお断りいたします。
ご利用になりたい場合は、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
までご連絡下さい。（特に表記のない資料は、大衆文化研究センター所蔵
品）

本展覧会に際して、立教大学図書館、野村胡堂・あらえびす記念館の各
機関、平井憲太郎氏、影山亮氏にご協力いただきました。心より御礼申し
上げます。

執筆担当 影山亮（さいたま文学館学芸員）、丹羽みさと（センター助教
責任編集）



捕物作家クラブと江戸川乱歩について

■はじめに

捕物作家クラブの発足は昭和24(1949)年7月7日の七夕である。

江戸時代の古典にも造詣が深かった乱歩は、探偵小説が海外作品のみを源泉とするのではなく、『大岡政談』などの比事物にも影響を受けていると考えていた。

昭和22(1947)年6月に結成された探偵作家クラブに、捕物作家たちも当然参加するものだとして話を進めていたが、「変格探偵小説」として捕物小説を軽視していた反対派の意見を退けることができなかった。

そこで乱歩は捕物作家クラブの創立を思い立ち、横溝正史らと共に発起人として奔走した。当時、捕物作家として確固たる地位を築いていた野村胡堂が会長となり、山手樹一郎や海音寺潮五郎、村上元三、吉川英治らが賛同した。会員の特徴としては、挿絵画家など作家以外の関係者も含まれていることにあるが、これは創立の経緯が所以である。

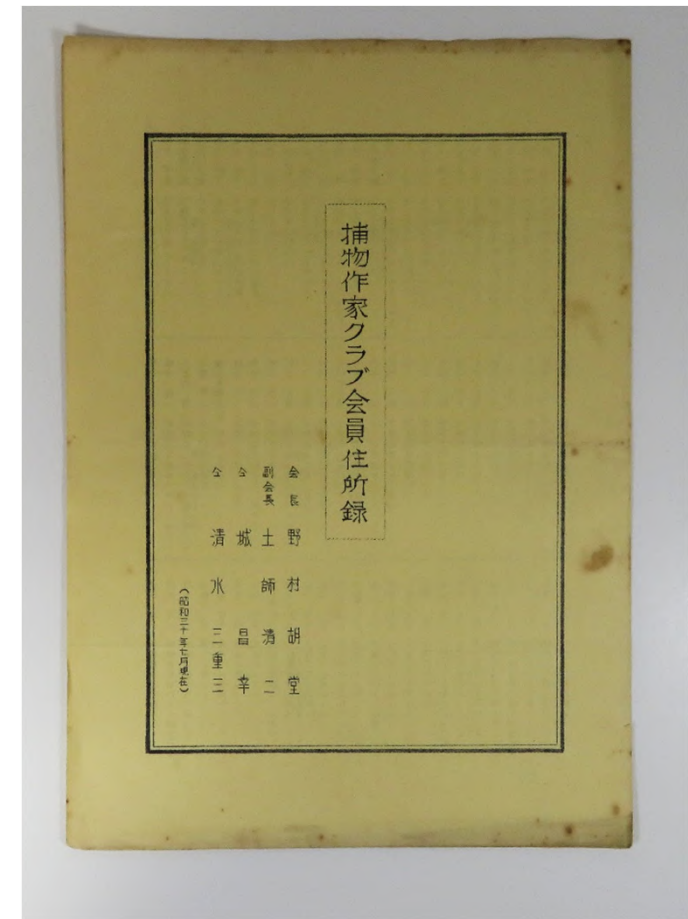
胡堂が自虐的に、「低俗な大衆小説の下位に置かれた捕物小説」(野村胡堂「捕物帖談義」『探偵作家クラブ会報』昭和23<1948>年12月)と語ったこのジャンルは、乱歩の理解によって注目され、日本特有の探偵小説という地位を獲得していった。



捕物作家クラブ会報

クラブ会員の動向や活動報告などが記載されたもの。

昭和26年～昭和31年 捕物作家クラブ
(立教大学図書館蔵)



捕物作家クラブ会員住所録

クラブ会員の住所録。表紙には会長野村胡堂、副会長土師清二、城昌幸、清水三重三の名前が見える。

昭和30年 捕物作家クラブ
(立教大学図書館蔵)

山手樹一郎と 「明朗闊達」な 遠山の金さん

■
1

捕物作家クラブ会員の中でも1番の売れっ子は、「桃太郎侍」の原作者山手樹一郎である。

長谷川伸の門下生だった山手は、明朗闊達な「桃太郎侍」（『岡山合同新聞』昭和14〈1939〉年11月2日より連載）で文壇から注目されていたが、大衆は真面目で重厚な歴史小説を求めており、不遇な時代を送っていた。その状況が一変するのは敗戦後のことである。

占領下、チャンバラシーンが禁じられたため、時代小説や時代劇映画は停滞した。しかし、剣劇のないストーリーを得意としていた山手は生き延び、「夢介千両みやげ」（『読物と講談』昭和23〈1948〉年2月より連載）で一気に世間に知られることになった。さらに同年、奉行所に就任する以前の遊び人の金さんがチャンバラなしに江戸の怪事件を解決するという「遠山の金さん」シリーズもはじまり、人気を博した。

戦後の時代小説を牽引した山手は、昭和39（1964）年「日本作家クラブ」（捕物作家クラブを改称）の会長に就任し、後進の育成に尽力した。

参照：影山亮「占領下における明朗時代小説の躍進—B六判雑誌『読物と講談』と山手樹一郎『夢介千両みやげ』—」『立教日本文学』令和2（2020）年1月

『大衆文芸』7巻4号

終戦後初となる巻号。チャンバラシーンのない山手樹一郎の「ざんぎり」と共に、村上元三「捕物蕎麦」を収録している。

昭和20年10月 新小説社（個人蔵）



『読物の泉』 2巻5号

「捕物競べ」と題した特集号で、山手樹一郎「水戸光圀」初出。ほとんどの作品に「捕物、の角書きがあることに注目。

昭和23年10月 東亜出版社（個人蔵）

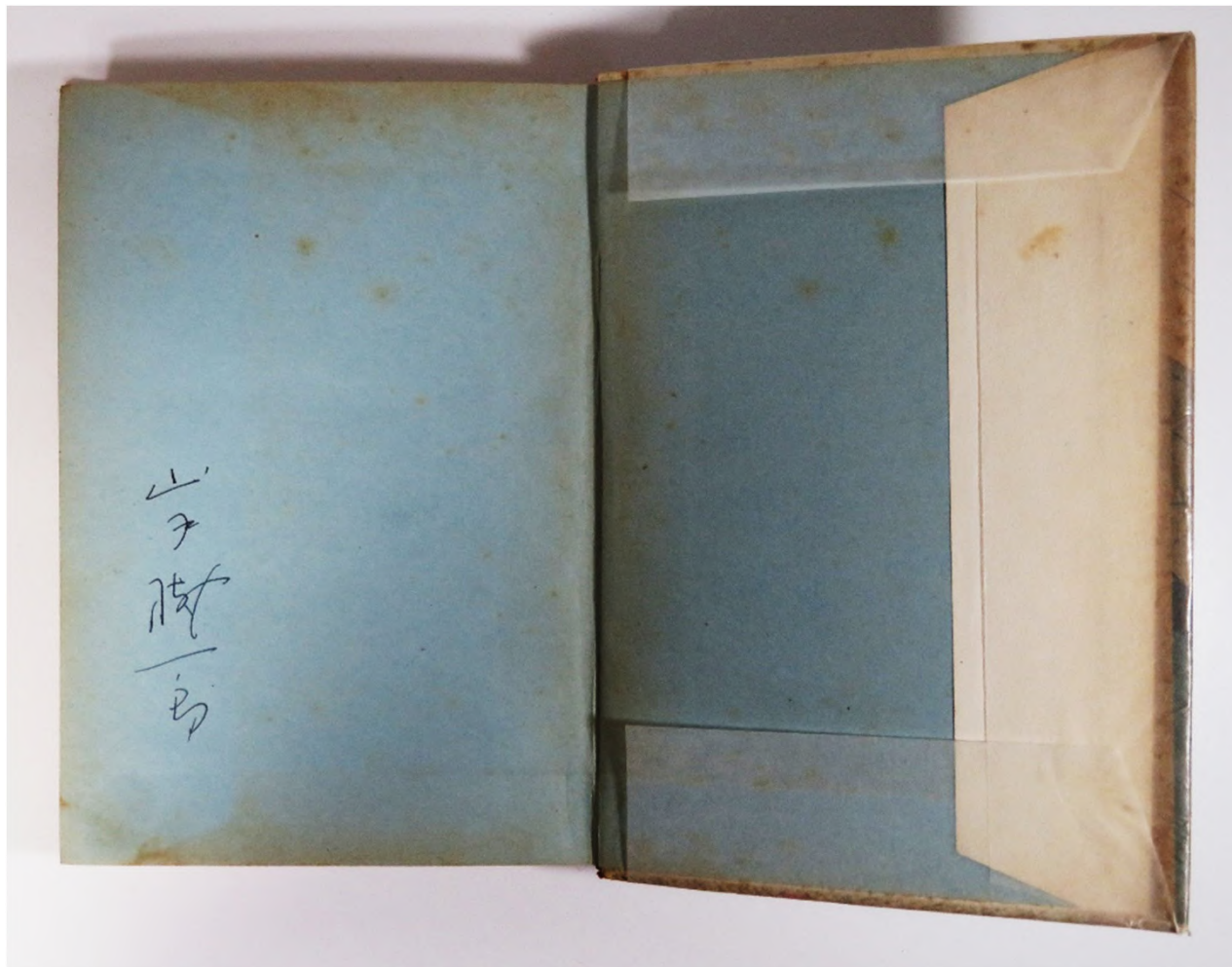




『講談の泉』第1集

山手樹一郎なりの捕物帳は「遠山の金さんシリーズ」。その1作「金さん刺青櫻」の初出雑誌。

昭和23年11月 矢貴書店（個人蔵）



山手樹一郎 『ほりもの桜』

山手作品の署名入り短編集。表題作は勿論
「遠山の金さん」シリーズの1編。

昭和26年3月 東方社（個人蔵）

探偵小説家として名高い横溝正史もまた、捕物作家クラブの一員であった。クラブの設立に尽力した乱歩と親しくしていたことや、会員である乾信一郎との親交が参加を促したとみられる。

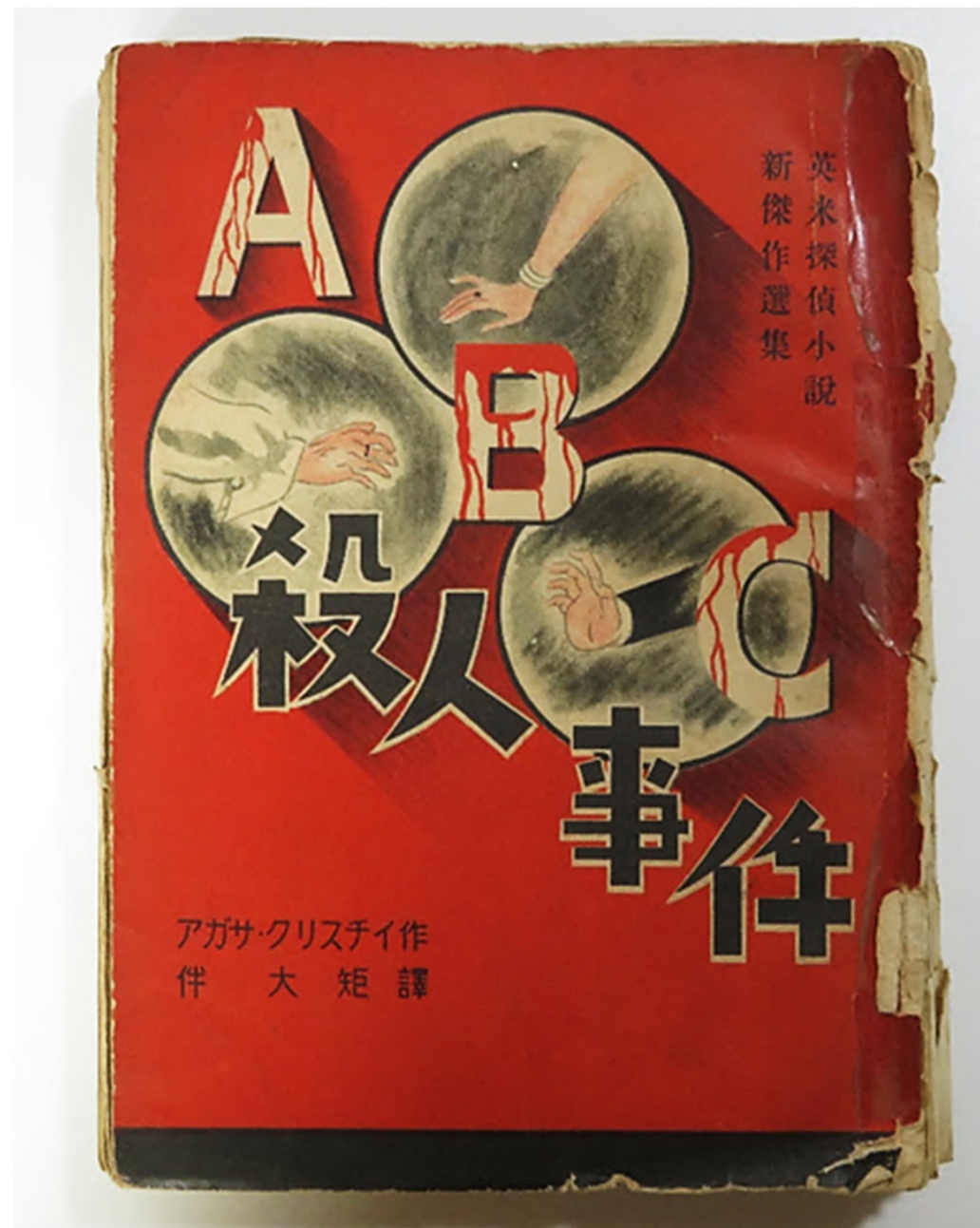
『新青年』の編集長であった乾は、昭和10年代、長野県上諏訪で肺結核のため療養生活を送っていた横溝に、「本格的探偵小説の意気」で捕物小説を執筆してみてはどうか、と進言した。それを受けて横溝は、愛読していた岡本綺堂の『半七捕物帳』と、映画「佐平次捕物帳」の登場人物から名前を借りて、人形佐七シリーズを書き始めた。人形のようにキレイな、色男の岡っ引きは、昭和13(1938)年新年号の『講談雑誌』「羽子板娘」にはじめて登場した。これはアガサ・クリスティーの「ABC殺人事件」のトリックを借用したものだと後に語っている。

横溝正史の『人形佐七捕物帳』は、主人公佐七の名推理や、物的証拠の積み重ねによって話が進む。後年、金田一耕助という名探偵を生み出した横溝ならではの、探偵小説的要素の強い捕物作品である。

アガサ・クリスティ
『ABC殺人事件』

人形佐七シリーズ第1作目「羽子板娘」の
典拠となった作品。

昭和10年 日本公論社
(乱歩旧蔵本 立教大学図書館蔵)

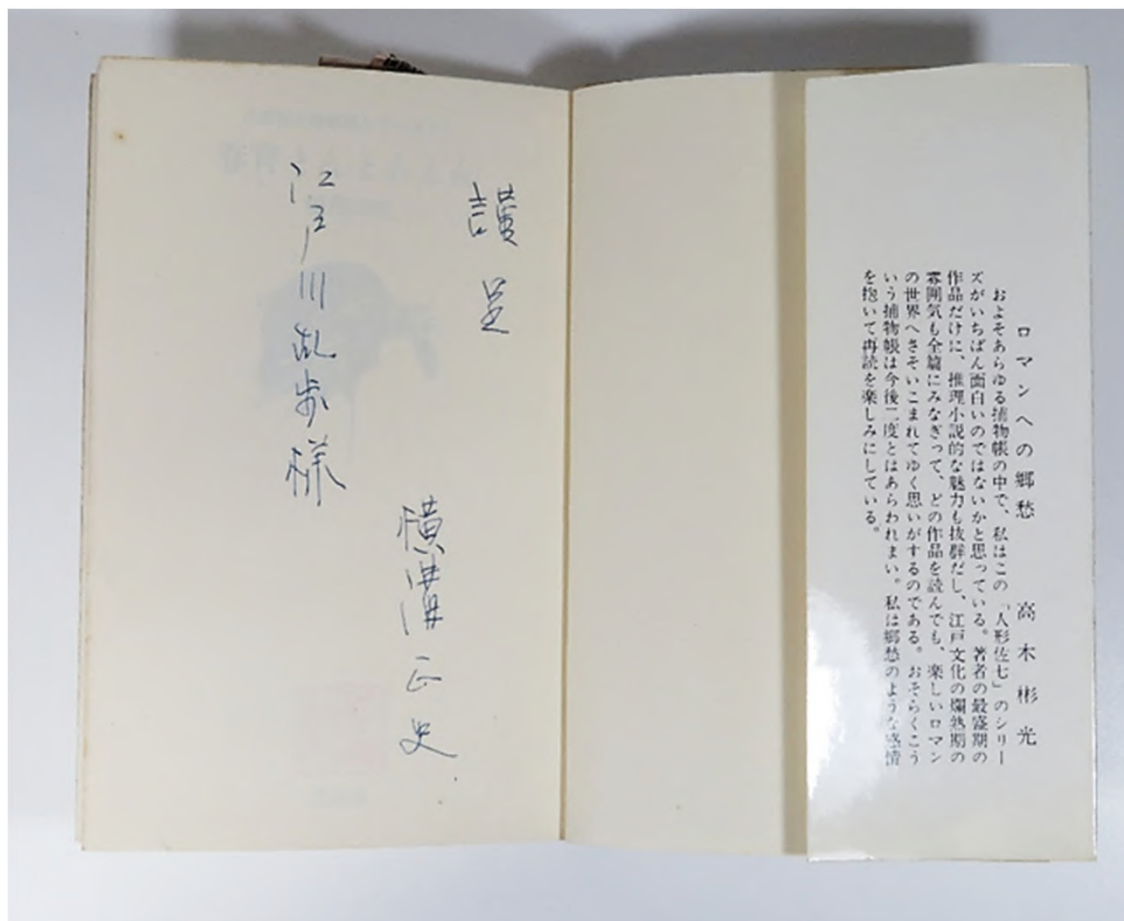


岡本綺堂『半七捕物帳』

捕物帳という小説ジャンルを拓いた金字塔。
推理よりもそこに描かれた江戸情緒を堪能
したい作品。

昭和30年 早川書房（立教大学図書館蔵）





『春宵とんとんとん』

人形佐七全捕物帳シリーズ1冊目。乱歩が最晩年に受け取ったもの。横溝正史のサイン入り。

昭和40年 講談社
(乱歩旧蔵本 立教大学図書館蔵)

『講談雑誌』 第32巻第7号

人形佐七の「吉様まゐる」は「八百屋お七」の登場人物名を借りた作品。「吉様まゐるゆかりの音信」とあることから、黙阿弥にも関心があったことがわかる。

昭和21年8月 博文館（個人蔵）



捕物作家クラブ会長 野村胡堂の交友

■
3

捕物作家クラブ初代会長の野村胡堂は、銭形平次の生みの親である。

寛永通宝を投げて悪人共を成敗する勧善懲悪の銭形平次捕物控は、最後の「鉄砲の音」(『オール読物』昭和32<1957>年8月号)まで総計383篇を数える人気作であった。

初代会長に推挙した乱歩と、それを快諾した胡堂との出会いは、大正14(1925)年に遡る。男女のロマンスと謎解きが混在する「算盤が恋を語る話」「日記帳」が同年4月、雑誌『写真報知』に掲載された。これはデビュー誌『新青年』以外で初めて乱歩作品が取り上げられた思い出深い雑誌である。その『写真報知』で当時、編集監督をしていたのが、ほかでもない胡堂であった。

応接室で顔を合わせた2人は、黒岩涙香作品の収集という共通の趣味で、意気投合した。現在も江戸川乱歩記念大衆文化研究センターに残されている乱歩旧蔵の涙香本は、乱歩の収集が過半を占めるが、胡堂からの贈り物も含まれている。涙香本の交換を通じて培われた彼らの交友は、捕物作家クラブ設立の布石となっていた。

参照：丹羽みさと「江戸川乱歩・野村胡堂往復書簡―黒岩涙香本をめぐる―」

『大衆文化』平成26(2014)年3月

寛永通宝

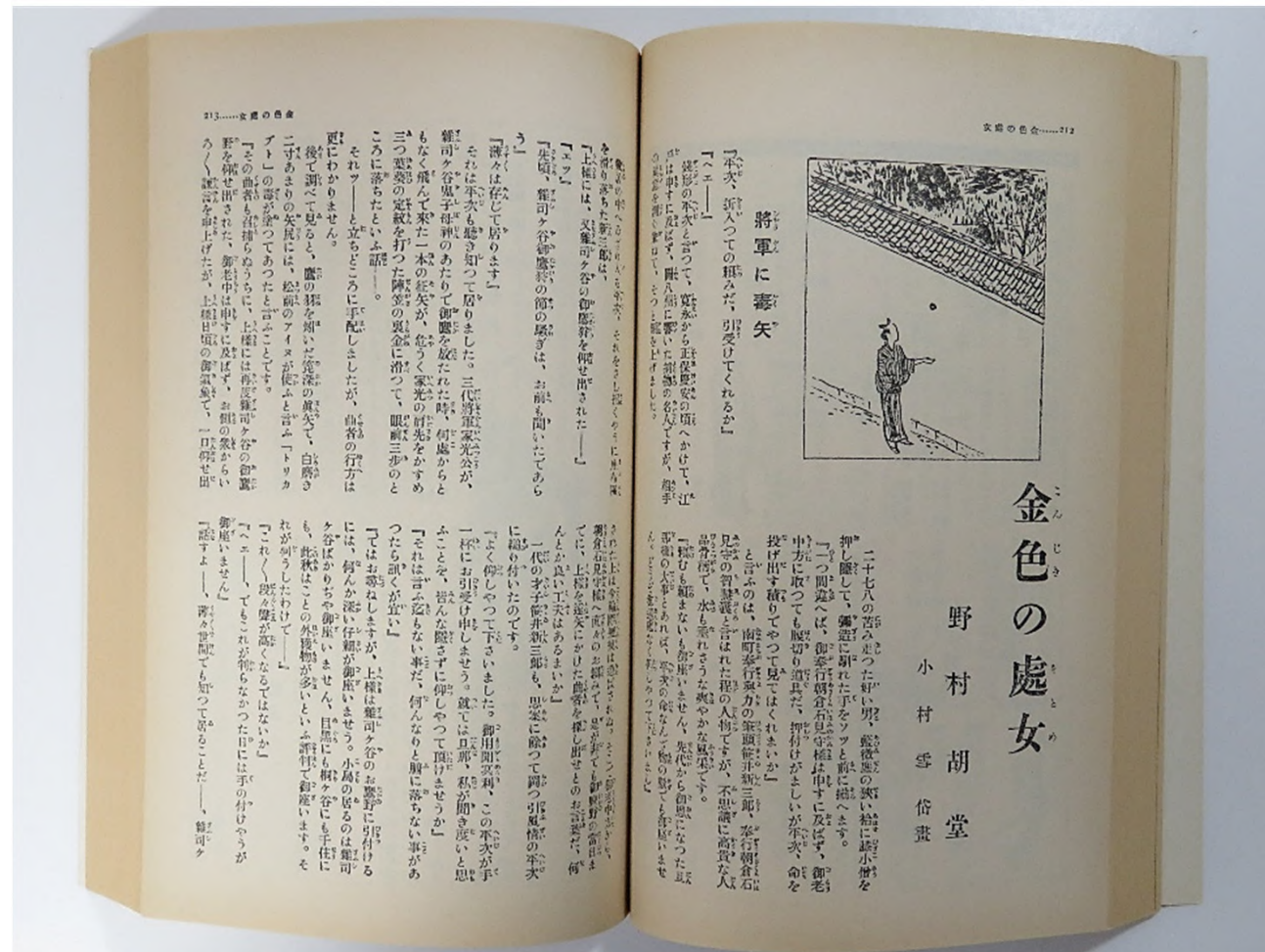
銭形平次のアイコンでもある寛永通宝。意外にも、『銭形平次捕物控』の中では、投げないまま話が終わることが多い。

(個人蔵)

『文芸春秋』 オール読物号

銭形平次が初めて登場した「金色の処女」。投げ銭を得意とすることが記されているが、ここで投げるのは山吹色の小判。

昭和6年4月 複製 (個人蔵)





黒岩涙香訳『噫無情』

涙香の代表作。原作はユーゴーの『レ・ミゼラブル』。徒刑囚戎・瓦戎（チャン・バルチャン）の生涯を描いた作品。

明治39年 扶桑堂（立教大学図書館蔵）

乱歩宛 野村胡堂書簡

乱歩から涙香本を数冊譲り受けた胡堂は、お返しとして乱歩が所有していない涙香本を神保町中探し回ったことが記されている。

昭和17年4月24日（センター寄託資料）



黒岩涙香『捨小舟』

胡堂が神保町の古書店から探し出し、乱歩へ贈った黒岩涙香本のひとつ。

明治28年 扶桑堂（立教大学図書館蔵）

若き日の乱歩と胡堂の出会いの思い出が記されている。初めて報知新聞社で対面した時から、黒岩涙香の本が話題になったことがわかる。

『日本探偵作家
クラブ会報』

若き日の乱歩と胡堂の出会いの思い出が記されている。初めて報知新聞社で対面した時から、黒岩涙香の本が話題になったことがわかる。

昭和29年10月（立教大学図書館蔵）

足歩氏と私と
 足歩氏は、江戸川李氏と野村胡堂
 足歩氏は、江戸川李氏と野村胡堂
 足歩氏は、江戸川李氏と野村胡堂

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

ちよつと珍しい 捕物作家クラブの活動

■ 4

戦後の捕物帳ブームの最中に結成された捕物作家クラブは、会員の職業や活動内容がバラエティーに富んでおり、`ちよつと珍しい`クラブだった。

発会記念事業として、捕物帳の生みの親である岡本綺堂の功績を讃え、「半七記念碑」を浅草寺に建立した。また毎年秋に「捕物まつり」と称した文化講演会や、捕物劇を上演するなど、さまざまなイベントを実施していた。

それらの経費は、有志会員の捕物小説を「捕物特集雑誌」にして出版し、その幹旋手数料から補填した。なかでも「黒門町の伝七捕物帳」（『京都新聞』昭和26〈1951〉年3月11日～同35〈1960〉年10月16日）は、会員がリレー形式で執筆を担当し、人気を博した同会最大規模の企画であった。

探偵作家クラブ会長であった乱歩は、捕物作家クラブのイベントにも積極的に参加していた。昭和27（1952）年12月11日に浅草公園六区花月劇場で開催された「第4回捕物まつり」では捕物劇に出演し、堀田備中守役の胡堂、黒門町の伝七役の土師と共に、遠山左衛門尉役となり見事な`競演`をしている。

参照：影山亮「侍と探偵の蜜月―大衆文学ジャンルの再編成における捕物帳―」

『大衆文化』令和2（2020）年3月

昭和21年6月 岩谷書店（個人蔵）



『小説の泉』

捕物作家クラブが携わった最初の特集雑誌。
随筆2作を含め全38作のボリュームだが、
全作が再録。書き手不足が顕著に現出している。

昭和24年9月 矢貴書店（個人蔵）



捕物作家クラブが作品を提供した特集号。批判が多かった「安吾捕物帳」に対する花田清輝の擁護論が掲載されている。

昭和二十七年七月、手塚上野樹実発行所 昭和二十七年十一月一日發行（臨時増刊号）昭和二十九年十月三十一日 日本図書刊行会臨時増刊部登録証第一四二四号

祭り小説物捕

読切小説集臨時増刊

書下し傑作揃い

植物作家クラブ提供

A detailed illustration of a young woman in traditional Japanese clothing. She has dark hair styled in a bun with red ornaments, wears a white headband, and has bright red lips. She is looking slightly down and to the side. The background is a warm orange-red gradient. The title '祭り小説物捕' is written in large, bold, stylized red characters at the top. On the left, vertical black text reads '読切小説集臨時増刊'. On the right, vertical red text reads '書下し傑作揃い'. At the bottom center, smaller black text says '植物作家クラブ提供'. At the very top, small print contains publication details and a registration number.

半七捕物帳 岡本綺堂 鈴木朱翁 162	人形佐七捕物文庫 横溝正史 167	遠山の金さん 山手樹一郎 中野実 143	鏡屋おかく捕物帳 土師清二 138	右門捕物帳 佐々木味津三 新藤兼人 128	瓢庵先生捕物帖 水谷津 167	捕物蕎麥 村上元三 木下二介 166	若さま侍捕物手帖 城昌幸 166	銭形平次捕物控 野村胡堂 時義典 166	池田大助捕物日記 野村胡堂 165	江戸の刑罰 半井良衛 160	江戸の捕物帳 左平次捕物帳 大井広介 160	名探偵人物論 荒正人 137	明小智 金田一 耕助 小地 神博 介 鼠 の 賛 123 130 124 112	山窩綺談 山刃の徒 三角寛 168	安吾捕物帳 狼大明神 坂口安吾 永田力西 171
------------------------------	-------------------------	-------------------------------	-------------------------	--------------------------------	-----------------------	-----------------------------	------------------------	-------------------------------	-------------------------	----------------------	---------------------------------	----------------------	--	----------------------------	--------------------------------------

『名作捕物小説』

捕物作家クラブが毎年刊行していた小説年鑑。「捕物作家クラブの歴史」など活動に関する記録も併載。

昭和28年2月 岩谷書店（個人蔵）



「荒神山」仁吉の家の場、右より山岡莊八氏（次郎長）大林清氏（神戶の長吉）村上元三氏（仁吉）



捕物祭り 恒例捕物祭りは昭和27年12月11日浅草花月劇場にて行われた。上は「謎文東海道土産」の一場、右より朝高端之助氏、一人おいて江戸川亂歩氏、一人おいて野村胡堂氏、瀧川設氏、次ぎ前列城昌幸氏、佐々木社太郎氏。下は「乗合船浮世繪姿」の場面。



木保清史氏（平手造酒）



志村立美氏（立美やお付）



江戸川亂歩氏（遠山の金さん）



『捕物絵図』

捕物作家クラブが編集に携わった作品集。
胡堂をはじめクラブ9人の作家による捕物帳
の競演。

昭和28年8月 東京文芸社（個人蔵）





『黒門町傳七捕物百話』

昭和26年3月11日から35年10月16日まで『京都新聞』に連載された作品。
書き手は捕物作家クラブのメンバーが、
リレー形式で務めていた。

昭和29年10月 桃源社（個人蔵）

『特集 文芸』

「名人捕物帳全集」と題した特集号。
クラブ会員だけでなく坂口安吾「安吾捕物
帳」等、幅広く収録されている。

昭和31年10月 河出書房（個人蔵）





「花嫁小判」ポスター

『黒門町傳七捕物百話』を八尋不二が脚色し、福田晴一が監督した作品。出演は高田浩吉、草笛美津子、伴淳三郎他。

昭和31年製作 松竹86分（個人蔵）

半七塚

捕物作家クラブ発会記念事業として、浅草寺境内に半七塚が建立された。綺堂の怪談・奇談集『青蛙堂奇談』に因んだ三つ足の青蛙神像も奥に見える。

昭和24年建立





ジャンパー

探偵作家クラブから、乱歩の還暦を祝して贈られた赤いジャンパー。胸の記章には平井家の家紋を挟み、ピストルと短剣がデザインされている。

昭和29年

法被・十手

昭和30（1955）年3月23日、遠山金四郎百年祭が捕物作家クラブ主催で催された。揃いの法被や鉢巻を身につけた会員は、南町奉行所跡周辺を神輿を担いで練り歩いた。十手には捕物作家クラブ会員章の文字が刻まれている。



銭形平次の碑

神田明神にある平次の碑の周りには、寛永通宝の文字がかたどられている。碑の発起人の中には、山手樹一郎や城昌幸など捕物作家クラブ会員の名前も見られる。

昭和45年建立

